

カラーで見える昔のお木曳 特集

昔のお木曳

カラー写真で甦る時代の躍動

おかびき 陸曳

外宮領は宮川から木を水揚げして奉曳車に載せて街の中を曳く「陸曳」です。宮川の出発点から外宮までの間は現代も変わらない奉曳コース。そのまた昔はお伊勢参りで賑わった参宮街道でもありました。

写真は第58回神宮式年遷宮御用材の奉曳として大正11年・12年に執り行われたときのものと思われます。場所は今も道路脇に欄干が残る筋向橋（すじかいばし）。現在のうらのし商店街の西側辺りです。

団名が確認できませんが衣装は帽子まで揃い。首に手ぬぐい。今見ても洒落ています。奉曳車は現代と変わらない仕様です。半被などからこの団が見当がつかましたらぜひご一報ください。



かわびき 川曳

内宮領は五十鈴川の中、ご用材を曳いて神域へ。この写真は、曳手の白い衣装から昭和17年・18年、第59回神宮式年遷宮の御用材奉曳だと思われます。昭和16年太平洋戦争に突入した、まさに戦時下。物資が制限され全奉曳団白一色の古代式浄衣となりました。町名の区別はタスキで（この時代から町名のタスキが使われるようになったようです）。五十鈴川の堤防（土手）に沢山の人が同行、見物しています。きれいな着物を着ている女の子もいて、戦中とはいえ特別な行事であったことが伺えます。

近年の技術により、古い写真をカラー化することが比較的簡単にできるようになり、今回はお木曳の資料写真（絵葉書など）を一部カラーでご覧いただけるようにしました。奉曳コースはほぼ変わりませんので今も当時の名残があります。ご縁のある方が写っているかもしれませんね。

大正時代以降、昭和の大戦前はお木曳行事を撮影し、印刷した絵葉書が多く出回りました。カメラが一般家庭に普及する以前ですから貴重な記録です。カラープリント写真に至っては昭和30年頃によく少しずつ家庭のアルバムに差し込まれるようになりました。

それぞれの時代を背景に、伊勢の人々が伝統として守ってきた行事。令和の時代のお木曳も先人達からの伝統を守り、未来へつなげていきたいものです。

ご用材貯木場

陸運が発達するまで、御用材は木曾の御杣山で伐採され、筏に組まれて木曾川を下り、桑名から伊勢湾へ運ばれました。写真を見ると、水運による搬送時の損傷防止のため御木は両木口を丸く（頭巾とよばれる）成形されているのがわかります。そして伊勢に到着した筏は大湊の貯木場に入りました。

そこで内宮分と外宮分に分けられました。内宮領は大湊から五十鈴川をさかのぼり、鹿海町の貯木場へ。そこから五十鈴川へ曳き出します。右の写真

は、貯木場で各町にご用材を分配するところ。一つの団ではなく、黒い半被に神宮のお印である大一の文字も見え、いろいろな半被や紋付きなどの衣裳が興味深いですね。

外宮領は、宮川右岸現在の度会橋の少し下流に貯木場がありました。左の写真は、宮川の土手にたくさん半被姿の人が集まり、貯木場から水揚げしたご用材を櫓に積み載せているところです。陸曳は、まず櫓で堤防を越え奉曳車に御用材を積みかえて、陸路を曳いて運びます。

